

“All Wars are Boyish”

——メルヴィルの四つの戦争詩——

中 村 紘 一

南北戦争と文学という問題を論じたものにエドマンド・ウィルソンの大著^①がある。ウィルソンはその中で戦争詩についてもかなりの頁を割いているが、メルヴィルの『戦争詩集』*Battle-Pieces and Aspects of the War*, 1866 に関する言及はわずか半頁足らずにすぎず、しかもその評価は極めて低い。ウィルソンは次のように言う。

メルヴィルは南北戦争をじかに見ることはほとんどなかった。唯一の例外は、戦場にいた甥を訪問した時の経験をもとにして書いた「オールディへの斥候」“A Scout toward Aldie”という長篇詩で『戦争詩集』に収められているが、それ以外はこの作品集はさまざまな短篇詩で構成されている。これらの短篇詩を賞讃する向きもあり、また確かに南北戦争を題材にした詩の中ではたいいのものよりは興味はあるが、しかし、自分には「斥候」を除いては正直なところ詩とは思われない。メルヴィルはニューヨーク出身で、ロウエルやホイティアなどのニューイングランドの詩人たちが抱いた南部に対する激しい敵意は持っていなかった。彼の物したものと云えば、韻文で書かれたジャーナリズム、つまり憂国の中年非戦闘員が愛国心を綴った年代記とも言うべきもので、彼はこれを前線から送られてくる報道を日毎読みながら書きとめたのである。実際に戦闘に参加したことの無い

詩人が戦闘を賞讃すれば極めて空疎な詩を生み出すことがあるのだ。^②

ウィルソンは、右のようにメルヴィルの戦争詩を手厳しく評価するのは対照的にホイットマンを大いに買う。その理由を次のように述べる。

ホイットマンもメルヴィルと同じくコスモポリタンの都市ニューヨーク出身であったが、彼はワシントンの北軍の病院で一年半に渡り奉仕活動をした。つまり、彼は病院でのこの経験がゆえに、報告されることのほとんどの戦争の側面について書けることになったのである。彼の『軍鼓のひびき』*Drum-Taps*と『リンカン大統領の追憶』*Memories of President Lincoln* は南北戦争の文学に優れた貢献をしているが、特に前者は戦争を題材にして戦時中に書かれたものでは最上の詩を収めている。ホイットマンは北部の大義にコミットしていたが、彼の詩は単にプロパガンダを爆発させたものではない。^③

二人の戦争詩に対するウィルソンのこういう評価はこれだけを読んでいる限り一般的であり、妥当であり、確かにそれなりの説得力を持っているように思われる。しかし、実際にメルヴィルの短篇詩を少しでも詳しく読んでみればそれは果してウィルソンの言うほどに空疎なものであるかという疑問が残る。

例えばこういう詩がある。

THE MARCH INTO VIRGINIA,

Ending in the First Manassas.

(JULY, 1861)

Did all the lets and bars appear

“All Wars are Boyish”

“All Wars are Boyish”

114

To every just or larger end,
Whence should come the trust and cheer?

Youth must its ignorant impulse lend—
Age finds place in the rear.

5

All wars are boyish, and are fought by boys,
The champions and enthusiasts of the state:

Turbid ardors and vain joys

Not barrenly abate—

Stimulants to the power mature,

10

Preparatives of fate.

Who here forecasteth the event?
What heart but spurns at precedent
And warnings of the wise,

Contemned foreclosures of surprise?

15

The banners play, the bugles call,
The air is blue and prodigal.

No berrying party, pleasure-wooded,
No picnic party in the May,

Ever went less loth than they 20

Into that leafy neighborhood.

In Bacchic glee they file toward Fate,

Moloch's uninitiate;

Expectancy, and glad surmise

Of battle's unknown mysteries. 25

All they feel is this: 'tis glory,

A rapture sharp, though transitory,

Yet lasting in belauled story.

So they gayly go to fight,

Chatting left and laughing right. 30

But some who this blithe mood present,

As on in lightsome files they fare,

Shall die experienced ere three days are spent—

Perish, enlightened by the vollied glare;

Or shame survive, and, like to adamant, 35

The throe of Second Manassas share. ☹

"All Wars are Boyish"

“All Wars are Boyish”

ヴァージニアへの進軍

第一次マナサス戦にて終る。

(一八六一年、七月)

公正な、より広大な、あらゆる目的に

妨害が現れるとしたら、

信頼と慰安はどこから生まれるのか？

若者はその無知な衝動を貸さねばならぬ——

老人の居場所はしんがりだから。

すべての戦争は青年のもの、そして青年によって戦われる、

かれらは国の戦士にして情熱家たち、

混乱した熱情とたわいない歎びは

無駄に衰えるものではない——

それらは成熟した力への刺激剤、

運命の準備物。

こんな時結末の予想など誰にできようか？

元気な若者なら先例を

賢人の警告を、

驚きの卑しむべくも抵当流れになるのを鼻であしらうのだ。

軍旗ははためき、らっぱが響く、

空は青く、尽きることがない。

喜び勇んだ莓狩りの一行も、

五月祭のピクニックに出かける連中も、

近くのある森に行進する時のかれらほどには

喜々としていなかった。

バカス祭のはしゃぎぶりでかれらは「運命」に向かって分列行進するが、

モレク神に初めて詣でる者たちなのだ。

まだ知らぬ戦闘の神秘に対する

期待と楽しい推測。

かれらの思うことと言えば栄誉のみ、

鋭い喜悅ははかなくとも、

栄えある軍記物語に不滅となる。

それゆえかれらは浮かれ騒いで出かけるのだ、

左におしゃべり、右に笑い声をあげながら。

しかし、足並軽く行進を続ける時に、

歓びを表わすかれらだが、

“All Wars are Boyish”

その何人かは三日もたたぬうちに経験を積んで死ぬことになる――

一斉射撃のまぶしい光に蒙を啓かれて滅びる、

それとも生き恥をさらして、鉄心石腸のごとく、

第二次マナサス戦の苦痛を味わうことになる。

この詩の副題にあるマナサス戦とは、一八六一年七月ヴァージニア州マナサス平原で行なわれた戦闘のことで、通称「ブル・ランの戦い」と呼ばれるものである。この戦闘ではマクダウェル指揮下の北軍は三万の兵を擁しワシントンを出発してヴァージニアへと進軍したが、ほぼ同数の兵を擁するポーレガード指揮下の南軍と相対した。結果は北軍約三千、南軍二千の戦死者を出し、敗れた北軍兵は混乱のうちにワシントンまで逃げ帰った。これは南北戦争開始以来の大きな戦闘で、人々は初めてこの戦争の悲惨を認識することになったという。なお、翌年八月、第二次マナサス戦（「第二のブル・ランの戦い」）が行なわれ、北軍は再び敗れることになる。

右のような具体的な事実をこの副題は物語っているにもかかわらず、その本文を読んでみてわれわれのまず気づくことはその内容が何と一般化されていることかということである。したがって、例えば第一スタンザの「公正な、より広大な、あらゆる目的」とは北部の若者たちが抱くかれらの大義――つまり、分離^{セパレーション}は行なわれてはならぬ、奴隷は解放されねばならないという具体を指し、それに対する「妨害」とはその大義を妨害する勢力、南部を言うのだということをわれわれは考えてみなければならない。

しかし、次に、その後の詩行を読んで行くと、どうもこの「妨害」とは単に南部勢力のことだけを指しているのではないような気がしてくる。この「妨害」とは、右のような大義を持つ戦争に勇んで出かけようとする若者を諫めようとするもの――つまり、老人の分別と慎重な態度のことを言っているのではないかと思われてくるの

である。なぜなら、この詩の四行目以下最終行までは主として若者対老人、無知対知恵、無垢対経験というテーマが問題にされているからである。

このように、この詩の内容は南北戦争第一次マナサス戦という具体をほとんど意識させないし、またそのイメージとスタイルも徹底してそのような使い方がされている。例えば四行目から七行目は、若者と戦争との関係についての一般的な一つの命題を述べる時のスタイルである。またこの詩がすでに過去の出来事を述べているはずであるのに、全体に現在時制（と未来時制）で終止していることも、臨場感を高めるために用いられるとする歴史^{ヒストリ}的^{カンゼン}現在^{カンゼン}などとして済ましてしまうわけにはいかない。

これは、具体的な一つの経験をより普遍的なものにしようとする神話化の傾向のあらわれともいうより他ないものであろう。北軍の戦死者三千名のことを「モレク神に初めて詣でる若者たち」というのも、モレク神はその人身御供として子供を火の中に投げ込むことを強要したという神話を踏まえているのだが、このイメージの使い方も右と同じ傾向のあらわれと解すべきである。

このように考えてみると、再び冒頭の「公正な、より広大な、あらゆる目的」というのは、北軍の大義であっても南軍の大義であってもよく、また、単に戦争のための大義だけでなくもっと広く若者が事を行なうための「あらゆる」目的というふうに普遍化してみることもできる。それを阻止する勢力を表わすのに、法律用語である“the lets and bars”という語を戦争詩であるはずのところに使用しているのもわれわれに違和感を覚えさせるのであるが、そのことは逆にそれだけこの語が比喩的な用法であることをいっそう意識させることになって、その意味する内容は拡大普遍化されて行くという効果をもっている。

「若者はその無知な衝動を貸さねばならぬ——」この一行は全体としては若者に与えられている価値に対する

作者の肯定を表わしている。しかし、肯定するのに逡巡があり、保留がある。「無知な」という形容詞は若者のマイナスの価値を言いあらわしているからである。同様のことが六行目、八行目の形容詞についても言える。まず六行目は「すべての戦争は boyish である」とする。この boyish という形容詞は、すべての戦争は若者（少年、青年）の起こすもの、そして、かれらによって戦われるものと一応解されるが、同時にまたそれは紛争解決の手段としての「すべての戦争は子供ばい、大人げない」という価値判断をも含んでいるのである。また八行目では、若者が持つ「熱情」と「欲び」にそれぞれ「混乱した」、「たわいない」というネガティブな性質を表わす形容詞が付されている。

このような逡巡や保留があっても、第一スタンザ最後では、そういう「熱情」や「欲び」は必ず若者に「成熟した力」をつけさせるための刺激剤となり、過酷な運命に対応できるようにと準備されたものとして作者によって一応肯定されていると解釈できる。（もともと十行目の意味は曖昧である。この一行は、そういった「熱情」や「欲び」は若者を過酷な運命に導くために用意されたものと解することもできるからである。もしそう解すると、十行目で述べられることは単なる幻想にすぎないということになって、まことに皮肉な意味をもってくる。）

第二スタンザでは、若者の抱く価値感やその行動に対する作者の肯定否定はいっそう屈折してくる。若者は「先例や賢人の警告を鼻であしらう」という軽率さをもつが、その代りにひたすら未知なるものに驚きの経験をしたという冒険心を備えているという。若者のもつ名譽感についても、作者はそれを「鋭い喜悦」（肯定）であるが、「はかないもの」（否定）とする。しかし、それは最後には「軍記物語に不滅となる」（肯定）と随分屈折した言い方で肯定する。もちろんこの肯定は若者自身が行なう肯定でもあるから、かれらはまるでピクニクに出かけるがごとくに進軍して行くのである。しかし、この実に楽しい様子を描く二十九、三十行目は、第

三スタンザで作者が行なう大きな否定のための布石となる。

未知なるものを経験したくてやまないという若者の欲求は、戦場に出て三日もしないうちに必ず満足される、ただし、その代償は死であるというのが三十三行目の意味である。これは若者の持つ価値感に対する作者の強烈な否定である。このことを表現するのに、三十四行目は秀逸なイメージが駆使される。この一行が表現するのはまず、あれほどあこがれていた戦場における体験の描写である。すなわち、「一斉射撃のまぶしい光に照らされる」という体験である。そして次に、若者はそういう体験をすることによって始めて「蒙を啓かれる」という無知なる者から経験者への変身を表現する。つまり、それは若者が抱き、また自分に与えられところの価値感——無知、無垢（戦争は若者のこの価値感によって引き起こされる）なるものを否定し無効であることを認識することである。しかし、こうして蒙を啓かれる若者は必ず死滅しなければならないのである。

蒙を啓かれた経験者は「成熟した力」になりうる可能性を持つが、それはその者が生存してこそその話である。その反対に、生き延びた若者には蒙の啓かれることがない。したがってかれらは「鉄心石腸」のごとく、次の戦闘（第二次マナサス戦）へと経験者＝戦死者となるために向かわねばならないというのが三十五、三十六行目の意味である。

若者は経験を求める。そして、戦争は若者に経験を与えるが、同時に死をも与える。したがって、若者はいつまでも「成熟した力」になることができない。つまりは「すべての戦争は若者のもの」なのである。次の「ボールの断崖」という詩もこのテーマで貫かれている。

“All Wars are Boyish”

|||

BALL'S BLUFF.

A Reverie.

(OCTOBER, 1861)

One noonday, at my window in the town,

I saw a sight—saddest that eyes can see—

Young soldiers marching lustily

Unto the wars,

With fifes, and flags in mottoed pageantry;

5

While all the porches, walks, and doors

Were rich with ladies cheering royally.

They moved like Juny morning on the wave,

Their hearts were fresh as clover in its prime

(It was the breezy summer time),

10

Life throbbed so strong,

How should they dream that Death in a rosy clime

Would come to thin their shining throng?

Youth feels immortal, like the gods sublime.

Weeks passed ; and at my window, leaving bed, 15

By night I mused, of easeful sleep bereft,

On those brave boys (Ah War! thy theft);

Some marching feet

Found pause at last by cliffs Potomac cleft;

Wakeful I mused, while in the street

20

Far footfalls died away till none were left.

ボールの断崖

耽想

(一八六一年、十月)

ある日の真昼時、まひるなか街中の家の窓辺で、

私は一つの光景を見た——このうえもなく悲しい光景を——

若い兵隊たちが意気揚々行進するのを、

戦場へと、

横笛吹いて、錦の御旗も華やかに、

その時、玄関、歩道、戸口はことごとく

壮大に声援を送る婦人たちでいっぱいだった。

“All Wars are Boyish”

兵隊たちは川面を六月の朝にふさわしく移動した、

心は咲き誇るクローバーのようにいきいきと

(時は風そよぐ夏)、

命がかくも力強く脈打つ時、

かれらには想像しえただろうか

バラ色の地に死がやってきてこのきらめく大軍勢を細らせるのを？

崇高な神々のごとく若者は自らを不滅と感じている。

幾週間が過ぎた。ベッドを離れ、窓辺で、

夜、安らかな眠りを奪われた私は想いを馳せた、

あの勇敢な若者たちへと(戦争が盗んで行った若者たちへと)、

進軍続ける足並は

ポトマク川が削った断崖の際でついに停止したのだ、

私が眼覚めて想いを馳せている時、街路では

遠くの足音が消えて行きその後は何の音もしなかった。

この詩の背景になっているのは、一八六一年十月、ポトマク川を渡っていた北軍四連隊が南軍の攻撃を受けて、百フィートの深さを持つ「ボールの断崖」で釘づけとなり、同月二十三日約千人の戦死者を出して四散したという戦闘である。しかし、そういう事実をこの詩もほとんど表わしていない。わずかに標題と、十九行目の言及が

そのことを思わせるにすぎない。したがって、この詩にうたわれていることがらは数ある戦闘での若者たちの死に通ずる。

この詩が前の詩と異なるのは、「私」という人物が登場して、その「私」の耽想という設定になっていることである。第一スタンザで、若者たちが華やかな婦人たちの声援を受けておそらくピクニックにでも出かけるかのごとく無邪気に出陣する楽しい光景を見る。が、この光景を「私」は「このうえもなく悲しい光景」と言う。こゝ断言する眼は当然若者とは対立する認識と価値感を持つ眼（老人のそれ）である。（因みに南北戦争開戦の年メルヴィル自身は四十二歳であった。）

第二スタンザで「私」は若者たちの出陣をなぜ「このうえなく悲しい」ものに感じたかその理由を述べる。若者は生命感にあふれる時には死を夢想だにせず、まるで不滅であるかのように感じている。しかし、自分の死を夢想だにしなかった時の死はそれだけにいっそう見ていて痛ましいのではないかという懸念が「私」にはあるからだ。

第一、第二スタンザの時間が六月の真昼時で、第三スタンザのそれはそれから何週間も過ぎた十月の夜である。六月の夏が若者を思わせる季節であるとするなら十月の秋はその若者が「成熟した力」を身につけていると考えられる季節である。しかし、この時の「私」は若者たちがボールの断崖で戦死した（「足並はついに停止した」、「戦争が盗んで行った若者たち」）ことをすでに知らされている。懸念は現実のものとなっていたのだ。ここに、再び「成熟した力」になれずして死んでしまふ若者のテーマをわれわれは見ることができる。

ロバート・ペン・ウォレンは最後のスタンザの意味は必ずしも明確でないという。彼は二つの読み方を挙げる。まず、第一は、戦場へ行進して行った若者たちがボールの断崖で戦死したことを私は夜窓辺で思っていると、

(街路に)「行進する隊の足音が想像されて、その足音が消えて行つた」という読み方である。彼は、しかし、次のような読み方の方がもっと相応しいという。つまり、同じように私が若者たちの戦死のことを思っていると、その時文字通り街路を誰か歩く人の足音が聞こえてきた。そして、「その文字通りの足音は若者たちに関する追憶と溶けあい、その足音が消えて行くことは今では幽界をさまよう隊の足どりを思わせている」というのである。この読み方の方が想像力をもっと活発に働かせることになり、個々の兵がそれぞれの運命に向かう時の孤独感を深める点でこの詩をいっそう豊かにするし、それにまた“footfalls”という語は行進する時の規則正しい足音を思わせるものではないからである。

ウォレンのこのコメントにはほぼ同意することができる。とりわけ、二十行目“while”まではあくまで私が思いを馳せたその内容を述べるのに対し、それ以下は対照的に外界の物理的な事象を述べたものと解して「足音」は実際に耳に聞こえてきたものとするのは自然である。そこでウォレンはその「足音」とボールの断崖で死んだ若者の足どりとを結びつける。しかし、十九行目は若者たちの行進は止まってしまったとしているのに街路で聞こえてきた足音をそれに結びつけて考えるのも変なものではなからうか。街路で聞こえた足音とボールの断崖で死んだ若者のそれとは一応無縁のものである方がすっきりするように感じられる。それならば、その足音は何であつたかということになるが、無理を承知の上で、別の若者たちが戦争に出かけて行く時のそれと解してみてもどうであろうか。今度は真昼の華やかな出陣ではない。老人や恋人たちが阻止するのも聞かず、夜、こっそり家を抜け出した若者たちが三三五五連れだつて戦場に向かうその足音である。この若者たちにもその家族にもボールの断崖での若者たちの戦死の知らせは届いているはずである。それなのにこの若者たちはそれに学ぶことがないからあくまで無知であり無垢であることになる。当然かれらもまた再び故郷に帰ることはできない。そのかれ

らの足音を聞いている「私」の悲しさと無力感はこのうえもなく大きい。あたらしい命が散って行こうとするのを傍観（聴？）する「私」も「成熟した力」などとても持ち合せていなく、夜には安らかな眠りさえ奪われる老人であるのだ。メルヴィルはこの「私」に自省の念をこめて自分自身の姿を投影しているのかもしれない。

次の「シャイロウ（シロ）の戦い」という詩では若者という言葉こそ見当らないが、やはり、若者・経験・死というテーマが取り扱われる。

SHILOH.

A Requiem.

(APRIL, 1862)

Skimming lightly, wheeling still,

The swallows fly low

Over the field in clouded days,

The forest-field of Shiloh—

Over the field where April rain

Solaced the parched ones stretched in pain

Through the pause of night

That followed the Sunday fight

Around the church of Shiloh—

“All Wars are Boyish”

“All Wars are Boyish”

The church so lone, the log-built one, 10

That echoed to many a parting groan

And natural prayer

Of dying foemen mingled there—

Foemen at morn, but friends at eve—

Fame or country least their care: 15

(What like a bullet can undecieve!)

But now they lie low,

While over them the swallows skim,

And all is hushed at Shiloh.

シャイロウ（シロ）の戦い

鎮魂歌

（一八六二年、四月）

軽やかに地をかすめんばかり、音もなく旋回して、

つばめが低く飛ぶ

曇天の野、

シャイロウの林野を——

そこでは四月の雨^が

倒れて苦しむ兵士たちの焼ける喉を慰め

戦闘のやんだ夜を通して降っていた

しかし、昼間は日曜日だというのに

シャイロウの教会をめぐっての戦闘だった――

丸太作りの、ぼつねんとした教会は、

死にゆく敵兵の数知れぬ

今はの際の呻き声と一つになった

素直な祈りをこだましていた――

朝には敵、が、夕には友――

名誉も国もどうでもよい。

(迷妄を打破するに弾丸ほどのものがあろうか！)

しかし、今、かれらは事切れて横たわり、

その上をつばめがかすめ飛ぶ、

そして、シャイロウはすべてが静まりかえっている。

シャイロウの戦いとは一八六二年四月六、七日、テネシー州森林地方にあるシャイロウ教会近辺で行なわれた戦闘のこと、北軍一万三千名、南軍一万名の戦死者を出し、ブル・ランの戦いに並ぶ大激戦だった。ヘニング・コーエンによれば、戦闘が実際に行なわれたのは月曜日であったが、メルヴィルはそれを日曜日に変えて瀆聖感

を出しているといふ。^⑥

冒頭の三行、終りの四行から判るように、この詩は今では静まりかえった光景を描く。動きのあるのはつばめの数羽だけ。鎮魂歌に相応しい静けさである。しかし、この静けさは修羅場を経た後の静けさである。文法的にはワン・センテンスのこの詩で、静けさの描写にはさまれる六行目から十六行目までの描写は戦闘、負傷、悶え、呻き、祈り、死といった阿鼻叫喚、激動と喧騒の存在したことを示す。

その間に、若者は無知と無垢の状態から経験者へと変容したことが指摘される。まず名譽と愛国心が若者たちを戦場に駆りたてた。それはかれらが無知であり無垢であり、蒙昧であつたせいなのだ。その意味で、「ヴァー・ジニアへの進軍」中の "enlightened by the vollied glare" と同様、この詩の十六行目のイメージはやはり秀逸である。つまり、やがて弾丸が、名譽、愛国心といった若者の抱く価値感を打破してくれるというのだ。弾丸（戦争）こそがかれらに自分たちの無知蒙昧を認識させるという貴重な経験を与えるのである。しかし、その弾丸は同時にまたかれらに死をも与えるのである。それゆえここでもまたせつかくの経験を与えられながら若者は「成熟した力」になることなしに「事切れて横たわる」ということになる。一方自然界は若者たちのこの挫折を知つてか知らないでかそれ独自の営みを続ける。この静かな自然の営みは若者たちにとって、鎮魂の作用をするといふよりも、痛恨の、皮肉な風景を呈しているように思われて仕方ない。

THE COLLEGE COLONEL.

He rides at their head ;

A crutch by his saddle just slants in view,

One slung arm is in splints, you see,

Yet he guides his strong steed—how coldly too.

He brings his regiment home—

5

Not as they filed two years before,

But a remnant half-tattered, and battered, and worn,

Like castaway sailors, who—stunned

By the surf's loud roar,

Their mates dragged back and seen no more—

10

Again and again breast the surge,

And at last crawl, spent, to shore.

A still rigidity and pale—

An Indian aloofness lones his brow ;

He has lived a thousand years

15

Compressed in battle's pains and prayers,

Marches and watches slow.

There are welcoming shouts, and flags ;

Old men off hat to the Boy,

“All Wars are Boyish”

“All Wars are Boyish”

田田

Wreaths from gray balconies fall at his feet,

20

But to *him*—there comes alloy.

It is not that a leg is lost,

It is not that an arm is maimed,

It is not that the fever has racked—

Self he has long disclaimed.

25

But all through the Seven Days' Fight,

And deep in the Wilderness grim,

And in the field-hospital tent,

And Petersburg crater, and dim

Lean brooding in Libby, there came—

30

Ah heaven!—what *truth* to him.

学生大佐

彼は先頭に立って馬上のひと、

鞍には斜めに置かれた松葉杖が見える、

片腕を吊るして副木をあてているのも見える、

しかし、彼は強き駿馬の手綱をさばく——しかも何と冷やかに。

連隊を率いての帰郷——

しかし、かれらは二年前に出陣した時とは打って変って、

ぼろをまとい、打ちひしがれ、疲れ果てた生き残り、

まるで漂流した水夫が——

寄せる波の轟音に肝を潰し、

仲間は波にさらわれてもう見えないのに——

大波を次から次へと突き進み、

疲れ果てやつとのこととで岸に辿り着いたよう。

おし黙ったこわばりと血のうせた顔いろ——

インディアンのような打ち解けぬ態度が彼の表情に孤独感を漂わせる、

彼は千年を生きたのだ

戦闘の労苦と祈りと、

葬送行進と長時間の不寝番に圧縮された千年を。

歓迎の喚声、そして旗の波、

老人は学生兵に帽子を脱ぎ、

華やかなバルコニーからは花輪が投げられて足もとに落ちる、

“All War^s are Boyish”

しかし、彼の心には——わだかまりがあるのだ。

それは片脚を失ったからではない、

片腕が不具になったからでない、

発熱に苦しんだからでない——

自分の命はずっと前から捨てていた。

そうではなくて、「七日戦闘」の間中、

荒涼たるウィルダネスの野の奥深く、

野戦病院のテントと

ピーターズバーグの弾孔の戦いで、そして薄暗い

リビイ捕虜收容所で瘦せこけて考え込んでいた時、現われたのだ——

ああ神よ！——彼には何という真実が。

コーエンとウォレンの注^⑦によれば、この詩の主人公はウィリアム・フランシス・バーレットというハーヴァード大学の学生である。彼の戦歴は壮烈であった。在学中に志願し、第二十マサチューセッツ連隊を指揮して、ペニンスラの戦いで片脚を失い、一八六二年十一月除隊、その後あらたに連隊を組織指揮して、ポート・ハドソンとウィルダネスでさらに二度負傷。ピーターズバーグのクレターターの戦いでは擲弾兵軍曹として活躍するが一八六四年捕虜となった。

メルヴィルは一八六三年八月、バーレットの凱旋パレードを故郷のマサチューセッツ、ピッツフィールドの自宅

で見物した。彼の家にも旗と花綱が飾られていたという。その時点でのパーレットは片脚を失くし腕を吊るしてはいたが、ウィルダネスでの戦いでを負傷とさらにリビィ収容所での拘留はその後のことで未経験のはずであるから、作品二十九、三十行目にこれらの出来事を書き込んだのはメルヴィルの作為である。しかし、この作為の意図は十分理解できることであって、メルヴィルはこの詩の主人公に出来るかぎり多くの経験を積ませたかったのである。したがって、この主人公はこれまでの三つの詩に出てくるどの若者にもまして経験にあこがれ、それを積んだことになっている。彼は数々の戦闘に「圧縮された千年を生きてきた」のである。

しかし、この主人公がこれまでの詩の若者たちと決定的に相違するのは彼が戦場から生きて帰ってきたということであろう。したがって、この詩は第三スタンザの三行が示すように何よりも凱旋の詩なのである。しかし、一見して明らかのように、凱旋の喜び、華やかさ、晴れやかさが描かれるのはこの三行においてのみである。その他の詩行は彼がいかに満身傷だらけであり、兵士たちも疲労困憊、乞食同然であるかを描く。もっとも、このような労苦を経たのであれば、それだけにその後の凱旋の喜びはいっそう大きくあるはずである。だが、彼はそれを素直に喜ぶことがない。歓迎の声に心から応えることができない。彼の心はわだかまりを覚える。そのわけが彼のなめた肉体的な辛酸のせいでないことを第五スタンザは伝える。それは、彼があればどこにあこがれていた経験を通して彼の内面に啓示のように現われたもののせいであることを最終スタンザは伝える。それは、無知であり無垢であった若者が戦闘の中で思いもよらぬ「真実」に触れた——これが経験というものに他ならぬ——のせいなのである。

ウォレンによれば、「この『真実』とは『ヴァージニアへの進軍』中の『一斉射撃』による啓蒙と同一視できるものであるが、どちらの詩にもその『真実』の内容は特定されていない^⑥」という。ウォレンがなぜこれに「シ

ヤイロウ」中の「弾丸」が打破するところのものを加えないのかは不思議で、当然それは同列に置かれるものである。ウォレンは続けて、「読者はそれぞれの詩のコンテキストから、そして、全体的なコンテキストからその『真実』の内容を感じとらなければならない。ここに見られる不特定性(open-endedness)はメルヴィルの特徴的な技法の一つである^⑨とする。

特定できないといいながらその内容を感じとらなければならないとするウォレンの言葉には矛盾を感じながらもわれわれはなぜ彼がそう言わざるをえないかを十分理解することができる。

それぞれの詩がある特定の戦闘をうたっていることから、その詩のコンテキストにしたがえば、「真実」の内容とは、一口に言って、その時の戦闘の恐ろしき、そして戦争の空しさといったものになる。しかし、次に、今まで見てきた四つの詩は共通していずれも若者が戦争に行くというテーマを持っているのだから、そのコンテキストでは、戦場でその若者は自らの無知、無垢を認識して物を識るようになること、つまり、経験者になること、——これがウォレンのいう「全体的な」コンテキストから感じとれる「真実」の内容であろう。

そして、四つの詩のうち三つまでは、この経験をなした若者はそれと同時に死なねばならぬのである。「真実」に触れるということ、つまり、経験をすることとは死ぬということに等しいのである。しかし、四つ目の詩の若者は死にはしない。ということは、経験を生き延びたこの若者は「成熟した力」になりうる最小限の条件を獲得したことになる。もっともこれはあくまで可能性の問題である。生き延びたところで、例えば、「ポールの断崖」中の「私」のようであるならばとても「成熟した力」であるとは言えない。「成熟した力」が何をなしているかはわれわれに知らされていないが、経験を生き延びた人間がどういうものであるかをうかがうことはできる。彼は当然もはや無知や無垢でなくなった人間であり、その外面的な姿は第一スタンザ四行目、第三スタ

ンザー！ 二行目な兵士といふのめんどろ。

メルヴィルのこれら四つの戦争詩を読んだ後で、ホイットマンの『軍鼓のひびき』からの次のような詩を読んでみる。

BEAT! BEAT! DRUMS!

BEAT! beat! drums!—blow! bugles! blow!

Through the windows—through doors—burst like a ruthless force,

Into the solemn church, and scatter the congregation,

Into the school where the scholar is studying;

Leave not the bridegroom quiet—no happiness must he have now with his bride,

Nor the peaceful farmer any peace, ploughing his field or gathering his grain,

So fierce you whirr and pound you drums—so shrill you bugles blow.

Beat! beat! drums!—blow! bugles! blow!

Over the traffic of cities—over the rumble of wheels in the streets;

Are beds prepared for sleepers at night in the houses? no sleepers must sleep in those beds,

No bargainiers' bargains by day—no brokers or speculators—would they continue?

Would the talkers be talking? would the singer attempt to sing?

“All Wars are Boyish”

Would the lawyer rise in the court to state his case before the judge?

Then rattle quicker, heavier drums—you bugles wilder blow.

Beat! beat! drums!—blow! bugles! blow!

Make no parley—stop for no expostulation,

Mind not the timid—mind not the weeper or prayer,

Mind not the old man beseeching the young man,

Let not the child's voice be heard, nor the mother's entreaties,

Make even the trestles to shake the dead where they lie awaiting the hearses,

So strong you thump O terrible drums—so loud you bugles blow.

ひびけ、ひびきわたれ、太鼓よ

ひびけ、ひびきわたれ、太鼓よ——鳴れ、らっぱよ、鳴りわたれ、

窓をつきぬけ——ドアをつらぬき——情けを知らぬ軍勢のようになだれこめ、

おごそかな教会のなかへ、そして会衆たちを追ひ散らせ、

学者が研究にいそむ学校のなかへ、

花婿だとして容赦はするな——いまは花嫁相手に幸福を楽しむときにあらず、

平和を愛する農夫にも、畑を耕しあるいは穀物を取り入れつつ、平和を楽しむことを許してはならぬ、

されば君ら太鼓たち狂おしく高なりひびけ——されば君ららっぱたち鋭い音で鳴りわたれ。

ひびけ、ひびきわたれ、太鼓よ、——鳴れ、らっぱよ、鳴りわたれ、
町々の雑踏のうえに——街路にひびく車輪の音よりも高く、

夜眠りにつく人のために家のなかにたとい寢床が用意されていても、誰ひとりそれらの寢床で眠ってはならぬ、

屋間にはどんな商売人の商売も——どんな仲買人も相場師も——いったい彼らはつづけるつもりか、
話をしているあの人たちは話をやめぬか、歌を歌うあの人たちはなおも歌おうとするつもりか、
弁護士は法廷で立ち上がり判事のまえで弁論を述べるつもりか、

ならばさらに生き生きと、さらに激しくとどろきわたれ太鼓よ——君ららっぱよさらに奔放に鳴りわたれ。

ひびけ、ひびきわたれ、太鼓よ——鳴れ、らっぱよ、鳴りわたれ、

和議はならぬ——いさめを受けてもやめてはならぬ、

臆病者は氣にかけず——めそめそ泣くやつ神だのみをするやつらは氣にとめるな、

老人が若者に哀願していても構わずにおけ、

子供の声も聞かせてはならぬ、母親の懇願もかき消してしまえ、

棺ひつぎをのせる台にすら、霊柩馬車の到着を横たわって待つ死者たちを揺すぶらしめよ、

されば強く激しく鳴りひびけ、おお恐ろしい太鼓よ、——されば高く君たちらっぱよ、鳴りわたれ。

鍋島能弘・酒本雅之訳

この詩は「第一ブル・ランの戦い」で北軍が敗退した直後ある新聞に発表されたものということであるから、

“All Wars are Boyish”

メルヴィルの「ヴァージニアへの進軍」が扱っている題材と同じ題材を扱っていることになる。メルヴィルの詩は南北戦争の結着がついた後で書かれたとは言え、この二つの詩は何という違いを見せていることか。メルヴィルの詩と較べてこの詩の内容は単純そのものである。ホイットマンは北軍の大義に完全にコミットしていたがゆえの、この単純率直さとも考えられる。だが、メルヴィルとしてその大義を疑うことはなかった。にもかかわらず彼の詩には躊躇、逡巡、複雑な心理とその屈折といったものがある。

ホイットマンのこの詩は単純率直であるがゆえにある種の力強さを持つ。それは若者を戦場へと駆りたてる力強さである。熱狂的な力強さである。ところが、メルヴィルはそれにこそ懸念を抱いたのではなかったか。メルヴィルの考え方にしたがえば、ホイットマンのこの詩に見られるような力に駆られて出陣する若者こそ三日も経ずして「真実」に触れて死なねばならぬというのではなかったか。

メルヴィルの先の四篇を読んだ後ではこのホイットマンの詩にやたら威勢がいいが何となく空疎なひびきを感じるのはいかんともし難い^⑨。ここで、『軍鼓のひびき』中のこの一篇だけを取りあげ、メルヴィルの詩と較べて空疎であるとするのは早計だろうし、またこの一篇をもつてホイットマンの戦争詩全体を云々するつもりも毛頭ない。それに同じ題材を取りあげてもこの二人ではそれを扱う手法は大きく異なる^⑩。

にもかかわらず、ホイットマンのこの詩をあえて挙げたのは、冒頭で紹介したウィルソンの、詩人と戦争の關係に関する論考と二人の詩人（メルヴィルも詩人と呼んでのことだが）、特にメルヴィルに対する評価にどこか割り切れないものを感じたからである。なるほどメルヴィルは戦闘にこそ参加しなかったが、彼の戦争詩は、ウィルソンの言うような戦闘を賞讃する詩でも、またいたずらに空疎な詩でも決してなかったのである。それに戦場に出かけたからといって必ずしも充実した詩が書けるものではなさそうに思われる。

